
燎人夜曲

かふえいん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

燎人夜曲

【Nコード】

N8839X

【作者名】

かふえいん

【あらすじ】

四神獣記外伝。祭りの支度に沸く赤の国の王都、南都に、火を噴き続ける陽山の主、鸞が舞い降りる。人嫌いだったはずの彼女は、絵描きの男を伴につれていて……。関心を余所に、鸞は王宮に残るかつての人の記憶と現在の交錯に、妙なる謡うたを聴く。

人嫌いの聖獣（前書き）

四神獣記外伝。赤の国の章2のその後の話です。

人嫌いの聖獣

夏の夜の、熱に埋もれた微かな涼しさを想う時、甦るひとつの旋律が心を揺する。それはまるで螢火のような、微かで淡い、遠い遠い記憶の歌だ。

風の音の中で、足元の男が何か言っている。耳の注意をそちらに向けてはみたけれど、やっぱり聞こえなかった。人の喉や腹では、風の中を通る声など出せはしないのだ。男の声よりも、遙か下を回る鳶のほうがよく聞こえる。その鳴声は驚きであり、鳥の主への歓待に満ちていた。

付け根に力をやって、ばさりと羽を空に打つ。足下には広く広がる草原と、麦の支度の始まる畑が広がっている。そして、以前と殆ど変わりなく、それらの中央に大きな都が据わっているのだった。空から見た赤の国の王都、南都は国の名に違わず、朱に包まれていた。遙か空の高みから、夏空を切る翼には五色の彩り。差すような上の空気の中、その周りを微かに光輝と熱が包んでいた。陽山の主たる聖獣、火山の焔を纏える巨鳥、鸞は、一人の男を連れて南都へと向かっていた。

「ちよつと！ 大人しくしてなさい、落とすわよ！」

こちらの声は聞こえただろうか、人の声音でも鳥の喉、きつと届いただろう。遠い鳴の群れの声のように何か騒いでいた男が、それでようやく静かになった。じつと下に目を凝らし、都の様子を窺う。以前、それでも、数千年は昔に見た都に比べればはるかに大きいが、その全景には今微かに違和がある。

「下りるわ。ちゃんと掴まって」

ひとつだけ、何らかの声の応えが返ってきて、鸞は勢いを付けて下降した。空気がだんだんと温んでいく。地面に近いほど、空気は熱されていて熱い。人間はそれが煩わしくなった時も、飛んで逃げ

られないから憐れだと思う。だから彼らはあまり火の山に近づかないのだろう。自分もそれを快しと思つて住みついた。あんなに遠い日の熱すら耐えられないのだから、陽山を越える街道も麓というには外れのほうを通つているのだ。ただ、今陽山の心臓はいつにまして躍動しているから、自分も煩いと思つてそこを出たのだったが。

「祭り？ こんな時期に？」

小鳥の声に、鸞は問い返した。下りるにつれ、小鳥の群れがこちらに語りかけてくるようになった。街ならばどこにでもいるから、人などを掴まえるよりも多くの話を聞ける。大抵が断片的で、なかなか要領を得ないものだとしても、彼らの声は美しいから好い。そして、知らぬものが無い。隠していることも大抵、鳥たちは知っている。鸞の問いに、彼らは繰り返す。壁、できた、野焼き、祭り、火の。

「なるほどね。新しい城壁が出来て、そのお祝いと麦のための野焼きで、火の祭りをするの」

寄つてきただけでも数百羽の鳥たちが一齐に、嬉しそうに然りと歌う。先ほど感じた違和はそれか。目を凝らせば、城壁の新しいのがわかる。そして、家々と新たなそれとの間に奇妙に空いた空間も、街の大きさを広げるのだ。そのために古いのを排して、新しいものを作つたのだろう。小鳥たちは、人の賑わいがいかほどかを語つた。外から見えるよりも人の心が既に祭りの気色なのだという。

祭りか。そうすると、少しばかり面倒な時に下りたかもしれなかった。祭りは人が騒がしい。そして、人の声は集まっても美しくならない。鳥の声が美しいのは、その意志を皆で共有しているからだ。人は同じことを思っているふりをして、その声音が揃わぬから響きが悪いのだ。それに、人はこちらを見て、指をさすから嫌いだ。見えているし、聞こえているのに、無邪気なふりをしてこちらを貶すから嫌いだ。ああ、人など嫌いだ。

鸞が都に下りるのは、今生きる者は知らぬほど昔振りのこと。ならば、下手に都の隅に下りるよりもまっすぐ王宮へ下りてしまおうか。

王宮の深部、朱雀の安らうところへと。翼を打たせて、速度を落とす。人の中でももうこちらに気付いたものがある。視線や声が向けられているのがわかる。

「もういや。どうして、ああもはばかりに見るのよ。失礼じゃないの?」

「そりゃあ、上から五色の大きな鳥が来れば、人は見るだろうが。なに、別に悪いことは言っていないぞ。驚いているだけだろ」

足元に紐で結わえた男が言う。勢いを落としたから、言葉が出せるようになったのだ。確かにその言葉は鳥の声もそう言っているから間違いはないだろう。ただ、鳥の声は純粹だからいいが、人の声は思っていることのそのままでないから、空恐ろしい。思うことをそのまま口にしないから、よくわからない。そして、口にせずとも思うことは胸のうちから零れているのに気がつかないから性質が悪かった。

よくもずつといられたものだ、弟は。鸞は嘆息し、王宮の上で数度羽ばたいて止まり、すぐに下りた。

とたん、官たちが騒いでいるのがわかった。衛士達の走る音がする。

「ほら、都についたわよ、イエンジー」

「お前なあ、フー。ここあ都つつつても王宮のど真ん中だろう」

自らを鳥の足に括る紐を解きながら、男　イエンジーは言った。「何よ、文句があるの? あんたが都が見たいって言ったんじゃない。私はまっすぐ陽山に帰ろうって言ってるのに」

そうだ、イエンジーが言いださなければ、自分はこんな人の固まった場所などに来なかった。でも、何度も都の華々しさを口説くから、寄らざるを得なかったのだ。否、自分はそれを聞く義理などなかった。ならば、何故この男のそんな我がまを聞いたのか。

「まあ、それもそうだな。いや、王宮なんて入れたもんじゃねえ。

こいつあ都合がいい。王でも描けるか、赤の王は美形と聞くしな」嬉しそうに、不精髭の上から頬を撫で、イエンジーは笑った。しぐさもつくりもまるで違うのに、ああそうだ。やはり似ている。

それもあるから来たくなかった。ここにはあの人の影がいる。

「その者動くな！ そのような巨鳥を連れて、王宮に何用か！ 術士妖魔の類ならただで置かぬぞ」

槍を構えた衛士が、こちらに刃先を向け、そう言った。鸞はじつとその衛士を見た。その瞳にも槍の先にも微かな振れがある。こちらが怖いのか。国の主に朱雀を抱いておきながら、鳥が怖いとはおかしな話だ。さてどうしようかと思っていると、傍らでイエンジーが声を上げた。

「二つもちゃんと目が開いてながら、妖魔の類だあ？ とんだ節穴だ。てめえ、この絢爛華麗なこいつが魔物に見えんのか？ ちゃんと見りゃあ魔なんて思えんほど、綺麗なもんだろ。どうみてもお前らんとこの親玉の知り合いじゃねえか。てめえじゃあ話が進まんもつと上の奴連れてこい！」

集まっていた衛士が戸惑うように、顔を見合わせる。そして、誰彼かを呼びにやっているようだった。もう来た、と衛士たちの向こうから声がした。人の群れを分けて出てきたのは、黒衣に赤い巻き布をした、帯剣の男だ。武官なのか。その眼は衛士達とは比べ物にならないほど、確としていた。

「魔獣でないのはわかったが、名乗りもされねばこちらからはどうもできないとは思わんか、御仁。私は王の近衛を務める、ルーユウという者」

お偉いか、とイエンジーが呟き、次いで、人になつとけ、とこちらに言った。

「人の姿みりゃあ納得すんだろ、名乗ってくれ。おれあ、ただの絵描きだ、偉くはねえからな」

フーはため息をついた。そして、人の姿から、この間得たばかりの自らの人型に変わる。花の舞うような風と、こちらの姿を見て人垣から嘆声が聞こえた。

「陽山が主、鸞である。弟^{てい}たる朱雀に会いに参った、すぐさま王を呼びやれ」

こちらを見て納得したようにルーユウと名乗った男が膝をつき、礼をした。いや、この男はこちらの正体に気付いていた。後ろの衛士達に知らせるためにわざと問うたのだ。

「御意に。しばしお待ち戴きたい、鸞様。そちらの御仁は」

「伴の絵描きだ、目につこうが放っておいておくれ」

そう応えると、は、と短い返事がした。

「目につくって何だ」

不満げなイエンジーに、違わないでしょ、と応えて、フーは呼びやられた王の現れるのを待った。

火の王

王宮の奥へ通されて、一つの部屋の前で南王が足を止めた。近衛に、外で待つように言ったようだった。黒衣の近衛は一度だけちらりとイエンジーに視線をやったが、御意に、と扉の脇に控えた。

茶と茶菓子の用意をしていた女官たちが、王が入ってくるのと一斉に礼をして退室していった。完全な人払いだった。相当に気を遣ってくれているのは弟が先になんやかやと言ったおかげだろう。勧められた席にめいめい座ると、南王は奥へと声をかけた。

「朱雀様！」

視線の向こうには花鳥風月の描かれた朱漆の衝立があつて、そこからひよっこりと子供の顔がのぞいた。裾の膨らんだ袴と、滑らかな裸の上体に赤い布を見に付けた、美しい少年だ。生まれた時から、火の華やかさそのものようだった、火焰の化身の我が弟。

「いらつしやったか、姉上！ 最後にお会いしてどのくらい経つてある」

弟 朱雀は出て来るなり、心の底よりの嬉しそうな笑顔でその声を上げた。そして、こちらの姿を見て少なからず驚き、傍らのイエンジーを見て、ぎよっと目をみはる。が、すぐにこちらに視線を戻すと、さっきまでの笑顔になった。

「あいや、見違えたかと思うた。やはり姉上は美しいの。此度はその姿を見せに来たのか、それとも」

「あたしは来るつもりなかったの、朱雀。これがあんまり来たいっていうから、連れてきただけ。……あんたくらいよ、私、前の私を綺麗だつて言うの」

口調を元に戻して、余所見をしていたイエンジーの袖を引っ張った。おう、と応えてイエンジーは居住まいを正す。どうやらあの衝立のほうを見ていたようだった。

「南王、口調を戻していいわね？ あたしもともとああいう話し方

苦手なの」

「ええ、構いません。ついでなら、私の話し方も戻したいのだけど」
ならお互い様、とフーは頷いた。良かった、と笑み、南王は続ける。前に見た王も、こんな風に気だての良い美丈夫だったと思いだした。

「聞いていた姿と違っていたものだから、衛士達にまで話が行って
いなかったの。中庭での無礼はごめんなさいね。それに、人が一緒
だと思わなかったわ。そちらは？」

寸時返事がなく、フーはまたイエンジの袖を引いた。また衝立
を見ていたのか。

「そんなに気になるなら、後で見ればいいでしょ」

「そうする。えっと、フーだけならまだしも、目の前の二人は王と
神獣なんだよな？ 俺あ……」

困った顔で頬を掻いたイエンジに朱雀が応える。

「構わぬぞ、世は気安く話されるほうが好きだ」

そいつあ良かった、とイエンジは応えて、ようやく笑み崩した。
「俺あ、絵描きでイエンジっつうんだ。陽山が火を噴くの見よ
うと思つたら、こいつが帰るついでに連れてきてくれるってんで、
ついでのついでに都が見たいって連れてきて貰った。いや、さすが
に南の主だな、王も美女なら神獣も紅顔ときた」

じっと黙っていたせいかわ、早口にそう話したイエンジに、いつ
も通りの気安さを感じながらも、微かに苛立ちを感じてフーは口を
つんと尖らせた。

「あたしを呼び捨てにしてる時点で、充分無礼よ。　こういうこ
と。せがまれたから寄っただけよ。すぐに陽山に帰るわ」

その答えに、三方から驚きが返ってきて、フーは、一斉に注がれ
た視線にたじろいだ。何よ、と応えると、誰よりも先にイエンジ
が不満げに応えた。

「せっかく久しぶりに都にきて、王宮に入れて貰えたんだ。もうち
つといたっていいじゃねえか、色々描きたいもんがあるんだよ」

そうだ、とそれに賛同して、朱雀も惜しげに言う。

「久しぶりに会ったのだぞ、姉上。もう少しゆっくりしたってよかる。それに今宵は祭りなのだ、見てゆかれると良い」

フーは二人の視線に、耐えきれずにへの字口のままそっぽを向いた。人をじつと見るのも苦手なのに、見られるのに耐えられるわけがない。こちらが困っているのに気付いてくれたのか、南王がそこに割り込んだ。

「イエンジーさん」

「お、イエンジーで構わん」

「なら、イエンジー。あの衝立が気になっているようだけど、何かあるのかしら」

朱塗り木枠に絶景を描いた図を乗せた金銀箔押しの見事な衝立だ。ああ、と応えて、イエンジーはさつと左目を覆った。残された、濁した右目でそれを見て言う。

「大した作だが、何か画が妙だと思つてよ。何か隠してあんのか、ただ誰かが直し損ねたのか、元の絵と違う」

南王と朱雀がようやくイエンジーの右目に気付いたらしい。そうだが、イエンジーの右目は視力を持たない。だが、その代わりにものの真実の姿を映す。どうということなのか、と問いたげな二人に、フーが応える。

「仙だつて。描いた通りに物を現せるの。私の姿もそう」

なるほど、と朱雀が応え、南王はその顔を花が咲くようにぱつと輝かせ、手を打った。

「なら、その本当の姿に、描き直してちょうだい。その間の衣食住はこちらがまかなうわ。鸞様、貴女の伴を、少しお貸し願えないかしら。その間、ゆるりと休めるよう人払いも充分にしますから」

それがいいと言わんばかりに、傍らの男と弟の顔が喜ばしげにほころんだのが解った。フーはまたまた溜息をつく。それに苛立ちはしても、これを拒否してしまったところで、自分は年頃の娘が我がままを言っているようにしか見えないのだろう。こちらの応えを待

つ、二人もまた断りにくくなるような眼でこちらを見ているのも、また耐えがたかった。

「いいわよ、もう。でも、もたもたしたら、あたし一人で帰るからおう、と応えたイエンジューは、ほんとこちらの頭の上に手を置いた。顔が赤く、ぽつと熱くなるのを感じて、フーは急いでその手を払った。

「ちよつと、何するの」

「いや、別になんでもねえ。礼を言おうと思ったただけだ」

痛むように胸が打つ。二度としないで、と言おうと思ったのに、言葉がでなかった。頭にさわられるのは、なんだか屈辱的で不快だ。なのに、それだけでないのが、きつと人目にわかるほどに頬を赤らめた理由に違いない。

『照れることはないのに、ただの礼だ』

今度はまるで、耳元で響くように、記憶が返る。この場所は、彼の影で満ち過ぎている。きつとゆるりなど休めないだろう。

話がまとまった、と南王は手を叩いて、外で控えていただろう、女官と近衛を呼んだ。

「ルーユウ、この方々は今よりしばらく、私の客として滞在される。その間、御無礼のないように、他の者に伝えておくれ」

短い返事の後、近衛はすぐに部屋を出ていった。きつと誰かに伝えて、すぐに戻ってくるだろう。案の定、すぐ外で誰かを呼びとめる声があった。そして、次いで女官たちに、湯の用意と衣裳部屋からいくつか物を取ってくるように言った。

「イエンジュー、それではうちの者が客人だと気付けないわ。服を貸すから、湯屋へ向かって頂戴」

イエンジューも、そりゃそうか、と改めて自分の服を見、袖や襟の臭いをかいで頷いた。待つてくれ、と言って、女官たちの後について行く。南王は部屋の用意もさせるわ、と席から立ち上がった、部屋から出ていった。朱雀と二人残されて、フーはようやく落ち着いていた、と言わんばかりに息をついた。

「これだけで随分疲れたわよ。それにしても、あんたが選ぶ王はみんなあなのね。気安くて、朗らかで、大抵美形。そんなにあの王が好きだったの？」

問うと、弟は意味ありげに笑んで応えた。

「そうではない、王を選ぶのは余だが、天命があつてのことだからの。それをいうなら、姉上のほうこそ、そうだ。あの男の本当に火王に良く似ておることよ」

のう、と強く言われて、まるで反射のように、そうじゃない、と応えた。凶星かと思うほど、それを認めるのは嫌だったからだ。似てないわよ、全然。朱雀が、気のせいか、というまでそれを否定した。ああ、それでも。

やはり、自分だけの思い込みではなかったのだ。イエンジーが彼と――火王と似ているのは。

掌

「じゃあ、あの男は単に行き連れということかの。姉上もまた、変わったの。人は面白かる？」

屈託なく笑む朱雀に対して、フーはつんと外を向いて応えた。変わった、変わったとはしゃぐ心理は、理解しがたかった。まるでそれが良いことのようにいうから尚のことわからない。変わったということは、変わる前のものが失われたということではないか。

「私は変わってないわ。人は、嫌い。嘘をつくもの」

「人でなくとも、嘘はつくぞ。それに、人も嘘ばかりではない。姉上」

それに応えず、フーは衣を引いて、椅子から降りた。そんなことは知っている、充分に知っている。椅子の足に裾がかかってフーは少しばかり乱暴にそれを引っ張った。

「どこぞへ行かれるのか」

「ただの散歩。あんたも、たまには外に出たら？」

そういうと、茶菓子に手を伸ばしていた朱雀はようやくむっとした表情でこちらを見た。

「余が外に出られぬのを知っているだろう、姉上」

神獣も王も、気安く外には出られない。だから、自分はその役を蹴った。どんな利点も籠に囚われることを良しとしなかったのだ。

で、自分が蹴ったから、弟がそれを受けて神獣朱雀となった。それに先に自分に命が来たとして、弟のほうがふさわしかったはずだ。共にただの火の鳥だったが、弟は真つ赤な火のようで、自分は灰や煙のようで。同じ地に生まれた同胞はらからでありながら、見た目がまったく違ったのだ。自分が醜いのは知っていたし、どうせ国の主になるなら、見栄えのする神のほうが人間も喜ぶだろうと思った。

「東の龍に会ったわよ。子供を連れて、天のほうへいったわ。何の旅か知らないけど、急ぎだっというてた」

「句芒か！　そうか、無事金環山を越えたか……」

朱雀は俯き、呟くように言う。

「やはり、初王のことを病むのかの。彼の者らが特別な王ゆえか」
「初めの王なんだから、そうなんじゃないの。あんただってそうでしょう？」

扉に向かいながら、フーはそれに応えた。

「初めの王は善き王よ。否、いつの時とて、王は皆善きものたちだつたぞ。あれは確かに善き王だったが……のう、姉上、初めだからゆえ特別だつたわけではあるまい」

「あたしには、わからない」

その問いは、何を問おうというのだろう。扉の引き手に手を掛け、ふとその手を止める。自分は、人といるのを避けて生きてきた。それは自らの身をさらして生きるのも、人生の伴を人にするのも厭わしかったからだ。だが、人を好み、人生の伴を人とした弟が、幾度も失うことを経てきたのは、自分がそれを味わうより辛かったのではないか。

「……悪かったと思ってるわよ。あんたに神獣の命を押し付けたこと」

引き手に掛けた手に力を入れる。

「姉上、余は……」

弟は声を詰まらせた。振り返ってみたが、ほんの少し悲しそうな顔でこちらを見るばかりだった。薄絹とはいえ重たい衣の裾を引き、扉を押し開ける。

「悔いても、恨んでもおらぬよ、姉上。余は」

弟の声が、背中に届く。その言の葉の先には続きがありそうだったが、構わずフーは外へ出た。弟はいつも自分に振り回されてきた弟をここに閉じ込めたのは自分だ。ずっと申し訳なく思っていたが、やはり目まぐるしく行き過ぎる王宮の時間に、人の命に触れているのに耐えられそうになかったのだ。

否、一度はそれも良しと思えて、耐えようと思った。そして、僅

か十数年ここで過ごしたが、結局耐えられなかったのだ。時間という酷なために耐えられなかった。

「ごめんね」

小さく呟いた。本人の前で言うことは躊躇われるし、開き直ってただ謝るだけの度胸もなかった。一度逃げたからには、もう全てが遅すぎる。

陽山に戻って聞いた、火王の訃報。そして、それより自分は王宮に戻らなかった。死にすらまっすぐ向き合えず、王宮を離れた自分には、もう謝ることすら許されない。

唇を真一文字に結び直し、フーは足を踏み出した。

きつと何度も建てなおされたのだろうか、王宮の造りはあまり変わっていないかった。確か王宮の端には、物見の楼があったはず。衛士のいる見張りとは別の建物だから、きつとあの場所なら人もいないはずだ。

「お、どうした、フー。散歩か」

廊下を進んでいると、別の廊下との交差で、イエンジーに会った。色とりどりの服を着た女官たちがその周りにいたが、服も身づくろいも変わっていないから、これから湯屋なのだろう。

「あんまりもたもたしないでよ、どうせあんたは大して変わらないんだから」

どこから湧いているのかもわからない苛立ちを乗せて言うと、イエンジーは笑う。

「そりゃそうだ。俺は大して変わらねえけど、服は良いのに替わるんだよ」

そして、いつもと変わらない飄々とした様子で、廊下の向こうを指した。替わって無ければ、王の居室のほうだったか。

「いや、南王様ってや、ただ美人ってだけじゃあねえんだな。色々こっちに気を割いて手間掛けてくれてよ」

はあ、と感嘆のため息を漏らして、惚けた顔でイエンジーは言う。

「心根が外見に合うから、余計に綺麗に見えるんだらうなあ。そうだ、お前も充分綺麗なんだから、もうちつと素直になりやあ……」

気がつけば、やっと届くようなその頬に平手を入れていた。突然のことにイエンジーはそこを手で抑えて、啞然としている。女官たちも充分に驚いたようで、戸惑いながらもこちらの様子を窺っていた。

「……なんだよ、怒ってんのか？」

わからん、といった風のイエンジーの問いに、フーは唇を噛みしめた。知らない。何で自分は今叩いたのだらう。いや、理由なんて本当は解っている。でも、それを頭の中でも言葉にしまつたら、もつと自分を嫌いになれるだらう。

「知らない！」

知らない、知らない。勢いよく、元から向かっていた楼に向かつて歩き出す。かつかと掌が熱い。ひりひりと痛む。熱いし痛い。何故。知らない。

「知らない……っ！」

『や、素直なほうが、ずっと可愛らしい。そうしているともったいないじゃないか』

見えた中庭の、陽のあたる花壇傍の長椅子。にこやかに笑む、楽人の男。その王たる者のつま弾く、妙なる琴の音。幻が視界の隅できらめいて消える。

灰に炭に染まったこちらを見て、綺麗だと言った男。そんな馬鹿なことを言うのは、弟くらいだと思っていた。その上、こともあるうにこちらに向かつてそう何度も言ったのだ。ああ、そういえば。傍に来やれといきなり手を引かれたときに、ああ、そうだ。同じように頬を叩いた。それでも彼は笑った。うっすらと赤くなってしまった頬に手をやって、ならまた今度、と。

良く似た顔で、後ろになった男は、今どんな顔をしているのか。怒っているだらうか。いや、怒っていたほうがいい。

掌が熱い。フーは手を胸に抱いて、駆けるように物見楼へと向か

つ
た。

変わらぬ楼、変わる音

楼に辿りつくと、その入り口に簡単な封がしてあるのがわかった。札も錠も縄も無く、ただ常人が入るのを拒むだけの、ささやかな術だ。そつと扉に触れるとそれが弟の掛けたものだど気付く。何のためには掛けたのだろう。人を入れたいようにと思えば、封などせずとも錠を落とし、王命を以て立ち入りを禁ずればいい。何か良くないものを封じるならもつと強い呪いまじながいる。

フーは引き戸の合わせ目を指で撫でた。ほんのりと薄紅の、やわらかな光が触れたところに集まる。解こうと思えばそれも容易い封だけれど。

『おいで、フー。都を見よう』

弾かれるように、フーは顔を上げた。曇りのない朗とした声。記憶をなぞる幻の声。そうだ、この楼は火王が造らせたのだ、広がりゆく美しい南の都を見渡せるようにと。今の賑わいなど想像もつかぬほど、ぽつんと小さく造られたこの街を見るために。そして、遙かに広がる南の草の海を見るために。気がつけば、フーは格子の扉を引いていた。封印は元からなかったかのように、何の抵抗もなく消えた。

「いるの……？」

フーは金欄の袖をはためかせながら、上階へ螺旋に続く階段を駆け上がる。

『おいで、ずっと待っていたんだ』

応えるような言葉、ずっと昔に失われてしまった声。この楼は王宮内の他の建物とは違う。一万年前と、少しも変わっていない。まるで時が止められていたかのように、調度の品にも細かな装飾のついた内装にも傷みや褪せがない。赤丹に塗られた階段の手すり、赤檜を柿渋で磨き上げた内側の透かし窓、吊り下げられた花鳥の飾り。自分と共に入ってきた風の匂いも、窓の外の風鐸の音も、何一つ変

わらず、あの時のままここに在る。自分を呼ぶ、懐かしい声も。微かに聞こえるのは、間違いなく彼の琴の音だ。

「ねえ！ いるの？」

声を上げ、息を切らしながら、フーは最上階へと上って行く。この建物は、どこよりも彼の気配がする。初めて名前を聞いてくれて、呼んでくれた人。この国を開いた朱を纏った楽人の。りん、と風鐸を鳴らし、吹く風は海棠の花の匂いを連れている。上へ上へと往くそれに押されて、フーは物見の階まで上りつめた。彼のつくった歌が、流れるような旋律が降ってくる。

『待っていたんだ』

桃実を模した手すりの飾りを掴み、フーは飛び込むように最上階へと駆けこんだ。ひと際強く風が吹きぬける。そして、音はぴたりと止んだ。

「あ……」

がらんと広い、物見の階。楼の窓はすべて開け放たれていた。ずっと開いていたのではない、きつとついさっき開いたのだ。ようやく聞こえ始めたのは、街のほうから聞こえる祭り支度の賑わい。

フーは唇を噛みしめた。

「馬鹿みたい……！」

誰もいるはずない。入口の封印は自分が解くまでかかっていたのだから。誰もいるわけがない。誰も、彼も。探した姿は尚更にあるわけなかった。一万年前に失われた人間を求めたところで、いるわけがない。

「馬鹿じゃないの、あたし」

強い調子で呟いて、フーは窓へと歩み寄った。どこまでも平らかな南の地は、こんな僅かな高さでもずっと先まで見渡せる。この楼は変わらなくても、見える景色はまるで違う。あの時見えていた都を囲う城壁は、随分と遠くなってしまった。これだけ広くなった自分の国を見たら、彼はどう思うのだろう。自分の興じたこの国を。

わかっている。きつと、誇らしげに笑うだろう。そして、嬉しそ

うに、子供みたいにはしゃぎながら、あちこちを指差して。ごらん、これが私の国だ、と。

フーは窓の棧に腰かけた。外に行く鳥がこちらに気付いて、仲間を呼びに行つた。いろいろ教えてくれようというのだらう。外の温い風に蘇芳色の髪を揺らし、フーはため息をついた。

とうの昔に、彼は死んだのだ。そして、その時自分は傍にいなかった。戦から受けた不幸によって変わってしまったその性情と病み弱つていくその姿を見ているのが辛かつたからだ。戦から崩御まで、それでも十数年あつた。でも、人にとっては長き時間も自分にとつては一時のこと。病んで倒れ伏すまで、間などなかつたのだ。

自分がいなくなつたことを彼はどう思つたらう。それとも、いなくなつたことに気付いていただらうか。もしかしたら、知らずにいたかもしれない。四方それぞれ、王が支払つた、勝利の代償のために。

火王は、光を。戦の中で深手を負つた彼は、あらゆる美しいものを愛でたその眼の光を失つてしまつたのだ。

見えなければ、前のように歩くことすら難いし、出歩いたところで見えるのは滔々たる暗闇だけ。彼はふさがちになり、居室から出ることも減つた。天の楽と名をはせた、琴の腕は変わらなかつたが、花の紅に木々の翠に朗々と謡つた、かつての歌の心は失われてしまつた。琴の音はただ切なく、悲しげに響くばかりだつた。

『君は、ずっと変わらない』

傍にいて欲しい。そう言つて、火王が掴んだ手を、自分は振り払つた。掴まれた腕の強さにも、合わなくなつてしまつた瞳も、恐ろしくなつてしまつたから。同時に、自分のせいで合わせられなかつた瞳は、もう二度と合わないのだと嘆き悔いた。

そして、あの時は、変わらないと言われたことに少なからず腹を立てたのだつた。見えていた時と見えなくなつてからが変わらぬ自分は、見た目など無いに等しいものだつたと。軽々しく外見を褒め

たかつての彼と、それを易々否定したその時の彼を無意識に厭うた。彼は確かに、弱っていた。だから、誰かを傍に置いておきたかったのかもしれない。それが、言葉通りに自分を求めて、それを拒んだのだとしたらどんなにか酷いことをしただろう。何も言わずに王宮を出て、彼は自分を探しただろうか。でも、その時の自分は酷いことだと知りながらもそうせずには居られなかった。初めは王宮の中にあつて火王を避け、やがて古巢の山へと逃げた。

傍にいて欲しい。かつての彼のものならばその言葉をどれほどか喜んだだろう。そう思えば思うほど、酷薄な自分を一層嫌悪した。

陽山へと帰った後、何度王宮へ戻ろうかと考えた。でも、あの痛々しげな、切ない背中を見るとわかつて戻ることは出来なかった。かつての姿を知っていれこそ、彼の心が乗せられた琴の音も歌も聞くことはできなかった。

「来なければ良かった」

共に過ごす時間を、何よりも求めて、何よりも恐れた。二人の間を流れる時間の河は、向こうばかりが足をとるような早瀬。

「あたしは、ひとりであれば良かったのに」

フーは呟く。俯く自分を、小鳥たちが心配そうに見ている。人は嫌いだ、どんなにあがいても自分は人になれなかったから。同じ命を持ってなかったから。時間を共有できないものと傍にいてはいけなかった。どんなに焦がれても、傍にいてはいけなかったのだ。

じわり、と視界が滲む。空は青いのに、臍に溶けていく。膝に下りてこちらを窺っていた小鳥が、落ちてきた雫に小さな体を振るった。

鳥の歌に、弦は震う

どうしたの、どうしたの、と次々に鳥が集まってくる。泣かないで、という声に、フーは眈まなじりを拭った。

「大丈夫、何でもないの、もう」

応えると、鳥はよかった、よかった、と歌った。鳥は素直だ、こちらが大丈夫だと言えば、その通りに受け取る。消してその裏を探ったり、探ろうとしたりしない。小さなものは膝や窓の棧に、大きなものは楼の屋根や近い建物の上に止まり、鳥たちはこちらに向かつて、そわそわとこちらを見ている。

陽山にいと殆ど出回らない鸞に、鳥たちはその目や耳の代わりとなって色んな事を覚えて来る。鳥は話すのが好きだから、鸞が知りたいことは鳥たちの間を伝わって、数日のうちには遠くの話も陽山に届く。今も、街の様子を話したくて、窓の棧に小さな音を立てながら、ちょこちょこ左右に跳んでいる。

「いいわよ、教えて。順番にね」

手元まで上ってきた小さな鳥の首のあたりを指で撫で、微笑む。くすぐったそうに、だが、嬉しそうにすり寄ってくる更に命短きものに、フーはようやく心安さを感じた。

鳥たちは、町人たちの話をしている。花火の職人たちが砲つづを持つて出たこと、祭りの飾り花を間違えて食はんでしまったこと、その後の野火に備えて、平原へと獣化できる武官が出ていること。フーは一つ一つに頷き、応えた。

野火が始まるまで、夜は飛んではいけない。大きな音がしても、飛び上がってしまうと危ない。何でもかんでも食べては駄目。武官に手伝うように呼ばれている、と言ったのは、番つがいの鴉だった。いつもは羽根のない鴉の兄けいが、宮殿から離れられぬ自分の代わりにと言ったそうだ。夕になったら、草原を見て来るらしい。鴉の兄とは聞いてみれば、あの黒い近衛のことだと言った。自分の獣性と同

じ獣は、主であり従であり、友となる。鴉は特に賢く自尊が強いから、それが兄と呼ぶのは大したものだ。他の鳥よりも人めかしい鴉は、兄も想い人と早く番つがいになればいいのに、と言って飛び立った。ひとしきり聞いたあと、ひと際高い声の白鷺がやってきた。王宮の池にいた、と足元の泥を振り落としながら言う。

「そう、南王が」

衝立の絵を描く絵描きの男に、ここに残って絵を描かないかと言った、と。その応えは、と問うと、そこから先は泥鱈どじょうを追うのに夢中で聞いていないと白鷺は申し訳なさそうに応えた。

「いいのよ。そう、よね。いろいろ描きたいって言ってたから」

なら、黙って飛び立ってしまおうか。陽山に帰ろう。そうして、火の山の轟きに、鳥たちの歌に、静かに暮らすのがいい。いくら仙の寿命と言っても、やはりイエンジーも人間、自分よりもはるかに短いそれなら、好きに使う方がいい。それにもう、人が変わりゆくのも、失われるのも見たくない。王宮は住みよく、常人も仙たる官も多い。彼らと同じ時を過ごし、天賦の画才を揮うほうが好ましいだろう。

「お礼くらいは、言った方がいいのかしら」

呟いては見たが、鳥たちは首を傾げるばかりだった。鳥たちは、感謝した時にはもう礼を言っているからだ。りん、と風鐸が鳴り、風が髪を揺らした。

木の軋む音に、フーははっとして後ろを振り返った。鳥たちが、また嬉しそうに歌う。と、小さな袋を手にした弟だった。

「ここにおられたか、姉上」

「なんだ、あんただったの」

ため息をつき、窓の棧から楼の内に下りた。一瞬でも期待に胸を打たせた自分に嫌気が差す。

「なんだ、とは。……すまぬの、姉上。待ち人ではなく、まこと気のきかぬ愚弟よ」

そう言つて笑い、朱雀は床にそつと豎琴を置いた。ゆるり、とフーは頭を振つた。謝ろうと思つたが、わつと沸いた鳥たちの声に、声を出し損ねてしまった。朱雀様、朱雀様、と鳥たちがはしゃいでいる。大きい鳥が来ている間、遠巻きにしていた小鳥たちまでがまた返つてくる。朱雀は小袋を手に窓までやつてきた。

「餌をやるうと思つての。いつも外の話聞かせてもらつから、その分の礼をだ」

姉上もどうか、と言われ、フーは手を器に差しだした。さらりとい入れられた、黍きびや粟あわの粒が指の隙間から零れて、小鳥たちが階下へとそれを追つ。

「下になつたのを追わずとも、まだあるぞ」

弟は張り出した屋根の上にざつと撒くと、空になつた袋を窓の外で叩いた。鳥たちは我先にと、聞きとれないほどに鳴きながら餌をついばんでいる。呆氣にとられながらそれを見ていると、足元に入つてきた鳥が、鸞様、と呼んだ。自分の手の中にあるのが欲しい、ということなのだろう。両手の隙間から細く、線を描くようにこぼしてやると、小鳥たちは一列になつてそれを拾い始めた。くちばしの先で粟の殻を器用に剥いている。

「殻は屋の内に残さぬようにの」

弟は面白がるうというように笑んで、床に置いた豎琴を持ちあげた。弟の身には大きい、鳳の首を模した飾りのある豎琴だ。

「あ、それつて……」

見覚えのあるそれに声を上げると、弟は然り、と頷いた。火王の残した、赤の国の至宝のひとつ。飴色に艶のある木の胴の部分と、細かに飾りが施された首の部分。ぴんと張られた弦は、風に吹かれるだけで微かに音を立てた。

「あやつくの箜篌くぞ。今は、余がたまに弾くだけだが」

「弾けるの？」

傍に寄つて尋ねると、朱雀はささやかに笑い、頷いた。

「ほんの少しばかり、あやつに習つたのだ。あとは……時間はたく

さんあつたからの」

窓の棧に腰かけて、弟は指先で弦をはじいた。弦の張りに狂いはない。次いで、奏でるのは、確かに火王が 彼が引いていた、歌そのものだった。鮮やかなる南の地を歌った、明朗な調べ。

「それ、結局あんまり使ってくれなかったのよね」

呟くと、朱雀はぴた、と弦を弾く手を止めた。残る余韻に、フーは言う。

「弓だけじゃ、貰ってくれないと思つたのにな」

その豎琴はもうひとつの神器、紅焰弓こうえんきゆうと共に、戦に向かおうという火王に自分が送つたものだ。人の和を好んだ火王は戦いを厭い、元が楽人ゆえに戦いが苦手だった。四方で一番、こと戦に關しては不安のあつた王だった。朱雀に変せても、尚何かあつたらと思ひ、弓を作らせたのだ。不思議に粘りを持つ鸞の血を、弦を張る膠にかわとなして。

武器だけでは受け取ってくれないかもしれない。なら、彼が得意とする琴も、共に添えて送ろう。そう思つて、自分は指を切り、これを作つた。良い出来の琴ならば、きつと喜んでくれると思つたのに。ところが弓こそ使えど、琴のほうは、以前のものを使うばかりで、これを引くことは滅多になかつた。

「姉上、あやつはの」

弟が眉尻を下げながら微笑んだ。

「姉上がこれを送つたのは、自分が戦いとうないとごねたせいだと思つておつたよ。ぐずる子をあやすように、くれたものだと思つていたのだ。奴はずつと申し訳なさそうだったぞ、自分に意気地がないから、姉上は自らを傷つけてまで、これをくれたと」

違う、とフーは首を振つた。違う。何も戦にやろうとて、作つたのではない。できることなら、戦になど出したくなかつた。王宮のあの陽のあたる庭ですつと、琴のを弾かせてやりたかつた。自分も、その傍で聞いていたかつた。

「命を守るためとくれた弓は、何としても使うと言つてな。だが、

自分の不甲斐なさと、余技のために、結果、姉上を傷つけてしまったことを申し訳ないとも常々言っておった。だから、あやつは使えなかったのだ。その代わり、こうしてずっと大事にとってあった」

朱雀は再び、白い指で弦をはじく。

『ごめんよ、フー』

楼の内にも外に流れるのは、彼にあてた優しい音色のそれ。フーは流れる歌の向こうに、彼のやわらかな笑みを見た。

箏篋……豎琴の一種、ハープのようなもの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8839x/>

燎人夜曲

2011年10月28日07時06分発行